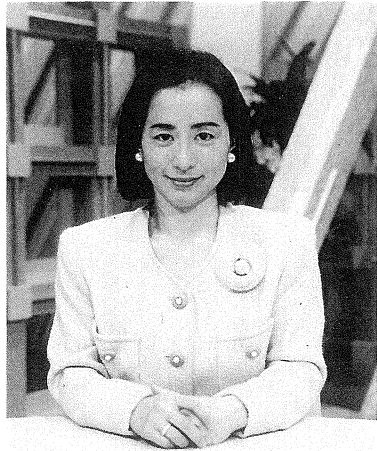


エッセイ

随想



あがわ・さわこ/1953年東京都生まれ。大学卒業後、慶應義塾大学幼稚舎図書室での勤務を経て、81年からTBSで海外レポーターとして活動をはじめ、「筑紫哲也ニュース23」「報道特集」等、ニュース番組を中心に活躍。現在はNHK「私のとっておき」(火曜22:30~)にレギュラー出演中。また「ちくま」(筑摩書房)で父・阿川弘之との往復書簡を連載するなどエッセイストとしても活躍中。

事に育んできたたくさんの人々の顔が透けて見えるからではないだろうか。
突然だが、私は東京生まれの東京育ちにもかかわらず、あまり東京が好きではない。昔はもう少し好きだったような気がするが、最近だんだんこの街を、好意的に見られなくなっている。
なぜだろう。

一つの理由は、愛着が感じられないからだ。街の景色の変化が急激すぎる。この前まで見慣れていた建物が、いつのまにか取り壊され、目を見張るばかりの斬新なビルに建て替えられている。まあ、ずいぶん奇抜なデザインのビルが建ったこと。おかげで周辺の雰囲気がすっかり変わってしまったなどと、最初のうちは

文化のない街

阿川佐和子

ふだん、文化などという言葉を意識して使ったことはほとんどない。映画を観て、美術館へ行つて、いい作品に出会つてどんなに感動したとしても、「ああ、今日はすぐれた文化に触れた」とは思わない。ただ、きいだったなあ、おもしろかったぞ、ああいう色の組合せもいいんだ、今度、服を買おうときに参考にしようなどと、具体的な部分で心を動かされ、願れば日常の生活に文句ばかりつけて落ち込んでいたけれど、これで明日から元気になるれそうだと、曰く言いがたい刺激を受けてウキウキするだけだ。

旅行というの、似たような要素がある。自分の知らない土地へ行き、景色、空気、人々の生活、その土地の人たちの大事にしているもの、食べ物、笑いなどを観察し、自分の慣れ親しんだ土地とは違う場所、こういう人々が、こういうことを楽しみにして人生を送っているのかと知つたとき、おおいなる刺激を受けて帰ってくる。それが何かと問われても、うまく説明はつかないが、そんなささやかな刺激によって、反省したり元気づけられたりするものだ。

考えてみれば、文化とはそういうものかもしれない。なにかしらの感動を与えてくれるもの、明日への活力につながるちょっとした元気の素ではないか。なぜそれが元気の素になるのか。おそらくそこには人々の営みや歴史、知恵や技、そして何より、長年にわたってそれを、美しいんだ、素晴らしいんだと主張して、大

単純に変化を喜んでいられるのだが、数年経つうちに、斬新に見えたそのビルも、こちらが愛着を感じる前に、なんだか古びて、またもや取り壊される運命となる。そしてその隣には、さらに近代的、今風のビルが建ち始める。いったいこの街はどういう街になろうとしているのだろうか。どんな居心地の良さを求めて、どこへ向かつて進もうとしているのだろうか。建築物が建て替えられるたびに考えるのだが、ちつとも答えが見つからない。

外国から友人が来たときに、東京の街を案内しろと言われると、いつも困る。自信を持って、こそ私の愛する街よと披露できる場所がないからだ。たとえばここは、最近開発が進んで、超高層ビルが立ち並ぶところですが、こちらは東京では数少ない歴史のある街並みだけれど、私は住んだことがないのでよく知りません。そんな説明をしながら、きちんと愛情を持ち、自分自身の言葉を使つて紹介していないことにハタと気づくのである。

ほんの小さな原つぽでもいい。幼い頃の思い出や、付近の人々との交流、祖父母から伝え聞いた昔話、そこで起こした事件、失敗、けが、けんか。その原つぽを見ればいくらでも話は尽きないような、そんな場所が残っていないものかと探しても、とうてい見つかるものではない。もしもそういう場所を他の土地から来た人に案内して回ることができたとしたら、ようやく、ははあ、ここにはそんな人々の文化が生きているのだなあと思得してもらえそうな気がするのだが、私の遊んだ原つぽは、影もかたちもなくなくなっている。

戦後、日本は目を見張るような勢いで経済復興をなしとげて、おかげで我々の年代はこんな豊かで便利な生活を享受することができている。しかし、その急激な経済復興は、何が何でも経済効率を優先し、スクラップ・アンド・ビルドを繰り返したために、大事な何かを失ってしまったのではなからうか。それは目に見えて大損害ではないものだから、あまり気づかれてはいないけれど、五〇年経って振り返ってみると、相当に取り返しつかない状態になってしまったような気がしてならない。

おそらく文化は、経済効率の観点から考えると、まったく逆流するシロモノなのだろう。そういう無駄がなくなくて、愛着も年輪も育まれていない東京という街に住んでいると、短期的な刺激に踊らされるだけで、ちつとも心は和まない。そのあげく、文化という言葉も聞いても、文化センターや文化交流などという常套、お仕着せの造語しか思い浮かばず、いよいよ皆さんだ人間になっていくような不安にさいなまれるのである。